八幡小まほろば通信 NO.5　　発行者　松村幸子

ほっとたいむ

発達支援のためには、子どもの困りごとについて考えることが必要！

通級指導教室『まほろば』では、基本的に子どもたちが困っている点や改善したい部分を「知る」ために発達検査をすすめることが多いです。

子どもたちのつまずきがどこからくるものなのかをよく理解するために、検査結果を活用します。その結果から、その子に必要なトレーニングを課題として通級指導をします。

発達検査にはいろいろな種類がありますが、今日は通称「ウィスク」と呼ばれている検査についてお話します。

WISC-Ⅳ知能検査（ウェクスラー式知能検査）
適応年齢　5 歳 0 ヶ月～16 歳 11 ヶ月

WISC（ウィスク）検査とは、**ウェクスラー式知能検査の一種で、児童を対象**としています。アメリカの心理学者・ウェクスラーが開発した診断的知能検査です。検査は、臨床心理士など専門家と 1 対 1 で行います。ウェクスラー式知能検査の目的は、個人の知能構造を診断し、得意・不得意を把握することです。全 15 の下位検査（基本検査：10、補助検査：5）で構成されており 10 の基本検査を実施することで 5 つの合成得点（全検査 IQ、4 つの指標得点（言語理解指標、知覚推理指標、ワーキングメモリー指標、処理速度指標）が算出されます。それらの合成得点から子どもの知的発達の様相をより多面的に把握できます。八幡小学校では、必要と感じられれば、専門的な資格のある先生に来ていただき、検査をお願いすることもあります。

※発達障害は、WISC-IV 検査の結果だけで判断することはできません。発達障害の判断には、日常生活や学校生活の困りごとについて保護者にヒアリングしたり、行動観察やスクリーニング検査などを行ったりして総合的に検討する必要があります。WISC-Ⅳ検査から自己判断するのではなく、専門家にアドバイスを求めることが大切です。

WISC-Ⅳ検査の各指標の合成得点が低いと、日常生活に困りごとが生じている可能性があります！！

WISC-Ⅳ検査の各指標の合成得点が低い場合の困りごとと手立ての例

言語理解指標（VCI）が低い場合

言葉でのコミュニケーションに難しさを感じるため、以下のような困りごとが生じやすくなります。

●相手の話が理解できない→**【簡単な言葉で、ゆっくりと伝える】**
●自分の気持ちを言葉で表現できない→**【言葉の選択肢を用意したり、代弁したりする】**
●説明しても相手に伝わらない→**【相手に伝わりやすくなる話し方のコツを教える】**

知覚推理指標（PRI）が低い場合

物の形を理解したり、物事の道筋を立てたりすることが苦手です。具体的には、以下のような困りごとが生じやすくなります。

●身の周りの片付けや準備が苦手→**【情報を視覚的にわかりやすくする】**
●漢字を書いたり覚えたりすることができない→**【形を言葉で定義する方法が有効】**
●算数の応用問題が苦手→**【数字や単位に丸を付ける･注目すべき点にアンダーライン】**

ワーキングメモリー指標（WMI）が低い場合

情報を一時的に記憶しながら物事を処理することが難しくなります。そのため、以下のような困りごとが生じる子どもも多いとされます。

●言ったことを忘れてしまう→**【１つずつ指示を与えることが大切】**
●忘れ物が多い→**【メモやチェックリストなどツールを活用して記憶を補う方法が有効】**
●注意集中が持続しない→**【余計な情報を視野に入れない工夫が必要】**

処理速度指標（PSI）が低い場合

目で見たものを正確に素早く処理することに困難さを感じます。書くことが苦手だったり、集中力が切れやすかったりする子どもも多いです。具体的には、以下のような困りごとが生じやすくなります。

●黒板を写すことが苦手→**【写す時間を十分に与える・タブレットで撮影などの配慮】**
●時間配分を立てられない→**【課題やテストにおける時間延長や次の課題へ入る声かけ】**
●サボっていると誤解される→**【子どものがんばりを認め、気持ちに寄り添う関わり】**

どの子も本当は認められたい、がんばりたいと思っているので、子どもたちに関わる大人は【支援のものさし】をたくさんもっていたいものですね。